
姉×Sisters + オマケ

城崎海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉×Sister+s+オマケ

【NZコード】

N5182E

【作者名】

城崎海

【あらすじ】

姉達と甘々？な生活を送る俺の物語！！ブラコンな姉達が織りなす、弟争奪戦のような…気が…しないでもない姉×5+オマケの物語姉が好きな人は特に！好きじゃない人は自己判断で読んでやって下さい。姉好きの姉好きによる姉好きの為の小説ちょいエロ予定！

第一話 姉達と危機とフアースト

現状とか説明する前に

取り敢えず、色々自己紹介とかしけやつてあるよ。

俺は、かなた ゆうき彼方結城

ある一点を除けば

そこら辺にいる平凡な男子高校生と変わりないと、俺は思ってる。

変なノリになることもあるが、それでも普通でしょう……ていうか普通であってくれ。

それで……ある一点つてのは……

「な～んで、布団の中に入つてやがりますか……アンタは……」

「へへ、ゆーくんあつたかいし

理由にならねーよ

あつたかい所に入りたいならコタツ入ればいいじゃん。

出じでないけど……

ある一点、姉が異常なぐらこ「ブラン」である事。

うふ、限りなくおかしいね。

まあ、この姉だけの話じゃあつませんが……

取り敢えず、あの「パソコン」には布団から、つていうか俺の部屋から出て行つて貰つた。

着替えたかったからな

それ言つとマジで居座りつとする危険性が高いから言わなかつたけど……

それでも暴れたし、うるさかつたけど無視できる許容範囲内
だいたい弟の布団中に入つてる姉つてどつよ。

取り敢えず今の状況を説明すると

俺が布団に居たのは朝だから、ところづい。

別に深くないよな

浅い、浅すぎるつーーつてへらひだと思つよ。

そして、あの姉の名前は彼方 莉子

容姿はかなり良い、出るとこは出でて引っ込んでるといは引っ込
んでる。

簡単に言つとモデル体型だな。

顔もメチャメチャ可愛いし、若干童顔で

頭もいいし

ただ…さつきから見て分かる通り極度の「パソコンなんだよ……

俺が他の男達から嫉妬されるくらい。

それに我が家の問題児はこの人だけじゃないしな。

何事もなく、着替えを終えた俺は朝食を取る為にリビングへと向かう。

家の構造は一階建てで、俺の部屋は二階にある勿論、リビングは一階にあるから俺は無駄に傾斜の高い階段を下りないといけない。

「みんな、おはよっ」

取り敢えずは挨拶

みんなと言つのは、他にも数人同じ家に住んでるから

まあ、家族

問題児はあの人だけじゃない、と口が酸っぱくなるほど言つていたけど……

「おはよっ、結城」

今、挨拶したのは彼方 沙織さおり
新聞を広げて見ていく、なんとも親父くさい……

本人の前で言つたらどうなったものか分かつたもんじゃないが……

何故だらう、またこの姉も可愛い…いやクールビューティーで綺麗と言つべきだけど。

それに強いんだ、俺なんか比じやないくらいに

またこの姉もブラン

だいたいわかると思うナゾ。

因みに彼方姉妹三女だ

莉子姉さんは次女

といつことは、もう一人居ることは確定してるわけだ。

「おはよつ、ゆう君ー！」飯出来てるよ」

Hプロン姿にスースとつ異質な服装で俺に朝の挨拶をしてきたのは彼方 雪彼方姉妹、長女

彼方家の殆どの家事は雪姉さん一人でやつてる。

まあ、偶に俺も手伝つたりはする

姉二人は全く

つていうか、こつちが手伝わさない

の人達に家事なんて言葉似合わねえよ

散々暴れ回して処理こつちがする羽目になる

経験済みだ

まあ、その後雪姉さんの怒りの鉄槌^{てつづい}が落ちたわけだけれども。

雲姉さんは社会人だ

結構有名な会社に働いてて

やはり容姿も良くて

その為に告白も絶えないらしい

まあ、この点は姉妹全員だ。

でも残念ながら…もう言わないぞ

「ありがと、雲姉さん」

家事をしてくれてるって事は、料理も雲姉さんが作ってくれてるし
うまいよ、かなりね。

「ああ～、雲姉さんには優しいんだ！…ゆーくんは

何時からリビングに居たんだよ、莉子姉さん。

「それは右から左には受け流せんぞ結城」

「マジで…アンタら一人は…」

最早、あのブラコン一人組はスルーする事にした。

構うとまた調子に乗るし。

取り敢えず、この美味しそうな朝食頂くとしよう。

「な～んで、雲姉さんには優しいのかな～、ゆーくん…！」
「どういう事だ結城！？」

横から「ギャアギャア」と声が聞こえるが無視。

「いただきまわ」

箸で玉子焼きを摘んで口に放り込む。

うん、何時も通り美味しい。

雪姉さん…あまつキラキラした田で見つめ過ぎないでくれ……

「うん、美味しいよー雪姉さん」

てか、いつも美味しいんだがね…

それを言つた瞬間、当社比一倍くらいで田の輝きをアップせせる。

「本當…やつぱりひかる雪姉さん…」

抱きついて来ぬとする雪姉さんの頭を掴んで止める。

何時も同じ展開だし、しつこな口調も。

「よしゅーくん、やれでこむーくんだよーーー！」

頭をおさえれば俺ついて、じつひと基準だよ。

「姉さん達も早く食べれば」

俺の反応をずっと見てて料理はずつと手付かず。

「ナリだね、食べちゃおうか…」

「食べちゃおうか…」

「りい姉、良い提案だ…！」

沙織姉さんも納得する所じゃなによ！

「私も賛成…」

「…」

つて、朝っぱらから貞操の危機ですか！？

「ふわーあ、ご飯出来る～？」

俺が貞操を失いつになつてこの時に、一階から大きな欠伸をして

降りてきたのは

彼方姉妹四女

彼方 茜

彼方家で唯一マトモな人だと俺は思つてゐる。

弟としてちゃんと俺を見てる…と思つ。

お酒を飲ませたら…まあ言わない。

…ああ後、唯一は『正』じよ。う。

俺もマトモだし。

「つてアンタから姉さん達なにやつてんの…！」

俺が絶対絶命の状態を見て茜姉さんが止めに入る。

さすが茜姉さん！！

うんうん、それだよ普通！！

今まで異常

この人達、異常…！

「え？ ……ゆーくんに迫ってるんだよ」

莉子姉さんがとぼけた顔をして茜姉さんに返答。

とぼけた顔も可愛いのが、なんかズルい
美人つて得だ

そうだよね、莉子姉さん…！

見ればこの状況大体把握できるよね
って、ちゃうわ！！

なにあつさりなんでもないかの如く答えてんだよ…！

「はあ～、ゆーくん食べたかったのに～」

「……ままでだな…」

「ゆう君、食べ損ねたか…」

なんで露骨にそこまで落ちこむるんだよ…

弟相手だぞ…

「…それでシツ ハハ所満載な姉居ますか…？」

いや、居ないとは言い切れないか……

世の中広いからな。

まあ、全て言葉には出してないからこの独り言は何もかも意味ないけど…

「まついつかつ…後でも良いし、でもあーちゃんは素直になつた方が良いよ」

「なつ！？私はソンナコト…」

後にするんかい！！とは言わない
折角姉たちのやる気が萎えた訳だ、ぶり返す必要は無いと頭の中で
コンマ三秒で思い付いたわけで。

茜姉さんは顔が真っ赤
沙織姉さんと莉子姉さんはニヤニヤ

でも意味不明な俺。

ああ…なんか虚しい…自分一人だけ理解出来て無いだろこれ

因みに雪姉さんは茜姉さんの朝食を準備してゐる。

偉いな文句一つ言わばず
見習いたいよ。

俺は確実に文句言つし

「あ～、もつ仕事だ……うへんもつちよつとゆつ君と戯れていたかつたな～」

戯れるつて俺は犬ですか！？

もつ会社に行く時間か…

今日は土曜日なのに大変だよな。

家ではこんなブラコンでダメダメな姉でも
会社では重役を任せられていて部下にも信用が厚い仕事人に変身する。

彼方家七不思議に認定つて感じ。

でも、一度聞いたことあるんだよ

家と会社でオンオフ使い分けてんのか？つて

そしたら平然と

「うん、ゆう君と一緒に居たら常にあらゆるスイッチがオンだよ」
つて言つてた。

寧ろ言いやがつた

俺が言いたい事は…

家でオンなんかい！！普通逆だろ！！
あらゆるスイッチってなんだよ！？
とまあ色々あるがどれも言わず。

「そうか…」と返しておいた。

“やつやつ俺は心中に言葉を溜めておく性格やつやつ。

取り敢えず、雲姉さんを玄関まで見送るところへ。

なんでこんな事をするかといつと、弟は玄関まで家族を見送る。というルールを作られたからだ。
まあ、大した苦ぢやないから構わんが……
なんか、納得出来ない。

「見送りありがとつ、ゆう君」

「いや、別に構わないよ雲姉さん」お世話になつてゐる

「じゃあ後、頼み事一つ良いかな?」

頼み事?なんだろう?

「良いよ、一つぐり……ん……」

「うううやつやつも、こつてきます

雲姉さんはイタズラが成功した子供のよつた顔をした後、そのまま家から会社へ向かう。

放心状態だった俺も指で脣をなぞつた所でなにされたか理解。

一瞬雲姉さんの顔がすぐ俺の近くに来て一瞬で離れた。

軽く触れるだけだったけど間違いなく……

キス……されたよな……俺……

「ええええええええええ！」

第一話 姉達と危機とアースト（後書き）

初めまして、城崎海です。

元気ですか？ああ、元気じゃない…すいません野暮なこと聞いて…

とまあ、「冗談はこのくらい」で

これを見てくれた人は、アレかな？姉好きかな？

私も好きです（笑）

取り敢えず頑張って書きます！なるだけ必死に…

感想どしどし募集しますよん

第一話 次女、三女とキス戦争

『ドタドタドタ』

騒がしい足音が近くまで迫つてくる。

「どうしたんだ、結城！？ そんな大きな声出して」

どうやら俺は声を上げていたらしい。

自分では気づいていない程衝撃的だつたわけだ。

だつてしまふがなくない？ 俺のファーストキスなわけだし。

「ゆーくんー？ なにがあつたの？」

沙織姉さんに遅れて莉子姉さんも玄関に到着した。

二人共過剰に俺の事を心配している事がありがたむべきか、呆れるべきか…

「で、どうしたんだ結城！？」

何時までもぼおーっとしている俺に痺れを切らしたのか、沙織姉さんが早く言えと急かす。

「こや…少し…」

「少しなにー？」

莉子姉さん、ガクガク揺らないでくれ吐き飯を催すから。

「いや……靈姉さんに……」

「なにしてんの？姉さん達」

丁度、俺の言葉をいい具合に遮る茜姉さん。

「あーちゃんタイミング悪い……」

「えつー…？」

「まあいい、続きを言つてくれ結城」

意味を理解してない茜姉さんは置ことくのか構わないけど……

「ただ靈姉さん……キスされた……」

「ええ~~~~~…………」

見事言葉を同じタイミングで発する二人。
いつもこのつてハモるといふんだつつか?

「キ、キスってあの唇と唇を合わせるやつなのかな、 そうなのかな
わーくん?」

なんで俺を襲つ時は普通なのにキスでは異常な反応するんだい。

「魚だよな……魚であつてくれ」

「魚つてどいつも事ですか？」

雲姉さんにキス（魚の方）された、つてどうこいつ意味だよ……

「こや、本郷に口のキス……」

俺は今喋った事を後悔した。

なにも今後の事を考えずペラペラペラペラ……

なんで後悔か……

だつてこの人達なら

「雲姉さん、許せない！……だつたらゆーくんのセカンドキスは私が頂くんだから……」

ほらね、完全に触発されてるし。

まあ、二人が俺へのセカンドキスを取り合つて潰してくれるから全然問題ないとしうけじさ……

なんか俺、ナルシストみたいなんだが……

「私が頂ぐ、と言いたいことだが……争つてもしょうがないしセカンドは莉子姉さんに渡すよ」

て、オイ！！

見事に俺の目論見から外れてんじやねえかよ。

「じゃあ私も妥協して、おちやんはサーブね

「なに勝手に話進めやがってんですかー？アンタいらは……」

「フフ……」

なんかいかにも

「変質者ですよ」と言わんばかりの怪しげな含み笑いを彷彿とさせ
るような顔の莉子姉さん。

これは本格的にヤバい…もう逃げるしかない…！

『ガシツ』

逃げようとしたその瞬間に素早く無駄のない動きで沙織姉さんに羽
交い締め拘束される。

その小さな体のどこにそんな強い力が？

これってさつきよりヤバくないかな？

沙織姉さんに羽交い締めされている為動けない。

といつかガツチリされてるからもがくことさえ出来ない。

近づいてくる莉子姉さんの目を瞑つた愛らしい顔。

ていうか凄い可愛いな我が姉ながら。

正直もう流されてもいいんじゃないか？とか思い始めてる辺り俺も
システムなのだろうか？

でもさ、しょうがなくないかな？

可愛いものは可愛いんだからさ。

所詮俺も盛りの付いたオスなわけで

「んっ」

そんな事を考へていたら、ビーナスが既に莉子姉さんの顔が近づいていたらしい。

とこつか脣が接触してゐる。

「ンッ…ジュル…アッ…」

莉子姉さんの声が耳元で艶めかしく聞こえる。

しかも莉子姉さんの舌が俺の口内をグチョグチョに犯していく。

これって…ティープなやつでは…?

「セレニまでして…いとせぬつてないぞ…!」

慌てて俺と莉子姉さんを離す沙織姉さん。

俺もこじまでされると思つてなかつたよ、全くな……

「「めんね…ゆーくんが可愛い過ぎて我慢出来なかつた

明るい顔して、反省してなによつた謝り方だな……

それに頬を桃色にさせて謝られてもな。

「はあ、ファーストキスがゆーくんで良かつた…」

つて、アンタファーストキスだったんかい!!

彼氏が居るとかそういう類の話は全く聞いて無かつたから居ないと

は思つてたけど……

そもそもブランだし。

つづか、ファーストキスで激しいのする人居るんだな……

なんていうか脱力感

うん、これは後遺症かな？

莉子姉さん？ああ、あの人は別世界にトリップしてる
「ゅーくん… ゆーくん…」ついつわいとのように咳いてんのが恐い
がな。

「つひ、なにやつひんのー！姉さん達ー！」

俺と莉子姉さんの熱い接吻を見て復活した茜姉さんが、今にでもキスしそうな沙織姉さんと俺の間に割つて入つてくる。

わつかの時点での、わざと正氣を取り戻して下や。

俺はもうかなりやられちゃつてるから。

「なに？つて接吻しようとしたが結城に

「見てわからないのか？」とでもいいたげな沙織姉さん。

勘違いしないでくれ、これは普通の事じゃないんだぞ。

「そんな姉弟で……」

もつと強く言つてやらないと駄目だつて。
負けたら最後だぞ、すぐに言つくるめられる。

「結城、顔を上げてくれないか？」

「嫌だつつの……茜姉さん助けて……」

驚愕した顔するなよ。

わかつたなんて言わねえだろ、普通の弟は
「フフ……結城……良い度胸じやないか……姉さん達にさせさせて私にさせ
せないと……？」

「うええーー！」

いつもは穏やかな沙織姉さんの後ろに般若が見えるぜ。

ていうか、姉さん達にも、不意にとか無理矢理にとかが主だし。

そんな事が伝わつて欲しい相手は全く理解してない風でかなり切れ
氣味の沙織姉さん。

勿論、俺の心が読めるなんてあまりにも憲法を犯す能力を持つてい
る訳が無いので

俺の反論は聞き届けられる筈もなく。

今ならわかる……俺死が近い……

「フフン……私は可愛い可愛い弟に酷い事をする気は無いぞ……ただ姉
さん達と同じようにキスさせればいいんだ……」

沙織姉さんの顔、つていうか脣が俺に近づいてくる。

てこ'うか、そいら辺がおかしくないかな？

何度も言つけど、弟にキスだよー！しないだろ普通。

まあ、今更の話だけじゃ。

茜姉さんは何してるのかな？弟の最大のピンチに。

それよりも、最早家族の崩壊だよ。

茜姉さんの位置確認と様子を観察してみる事に。

必死で目を背け、こっちを見ないようにしてる……

ウブだつたんだね～

さつきの俺も似たようなもんだつたけど。

今はヤケクソ？みたいな

つてそんなことどうでもいいわ！

取り敢えず、沙織姉さんを止めるすべを考えなければ。

止める？どうやつて？

右見て、莉子姉さん…別世界へ。

左見て、茜姉さん…固まつていて使い物にならない。

自分で見て、力づくり…この人に？無理だろ、そりや沙織姉さんに勝てる気なんて全くしない。

それに女性は傷つけられ無い主義だし俺は。

ところ「」とは、これって脱出不可能つ「」とじやない…？

「どうしたんだ？結城からしてくれば、勿論脣にマウストウーマウスでな」

ハハッ、つと屈託の無い笑みで宣^{のたま}う。

その笑みはかなり魅力的で一瞬クラッとなつた、といつのは内緒の話。

ん…！？

何時の間にか俺から沙織姉さんにキスする事になつてない…？

突つ込んだら負けな気がするから突つ込まないけどさ……

「沙織姉さん、じつくつ色々と考えてみない？」

「なにをだ、結城？」

いや、普通に疑問点が俺はあるのだが…

「姉弟でさ、キスするなんておかし…」

「おかしくないぞ、外国では姉弟で結婚なんて稀^{まれ}じゃないと思^つう」

いや、稀なんじゃないの？と言えないチキンな俺。

どうしようもなく怖い。

なんていうか色んな意味で

「さて、無駄話はここいら辺で終わりにしてくれ、結城」

無駄話つて…

それ止めたらキスするだけじゃん。

改めて言うがキスってのは嫌な気分じゃない。

勿論こんな美人とキスなんて夢みたいな事だし

かといって

「沙織姉さん、キスしよう」なんて簡単に言えない。

そこいら辺は世間体、羞恥、etc…

「ふわあ～あ、おはよ～みんな…どうこう」と?「これは?」

二階から優雅そして華麗に舞つ蝶のように、降りてきたのは

彼方家姉妹五女

彼方 猫仔ねここ

名前に入っているように猫のよつな仕草がとても多い姉。実際さつきは顔を手でクリクリしながら降りてきた。

更には頭を撫でたらかなり気持ち良さそうな顔をしたりして。

猫が好きな人にはオススメの一品!~!

もち、プラコンだよ。

しつこいかな?そろそろ

とこりうか、まだ居たのー?って感じだと想つ。

大丈夫、これで終わりだから安心してくれ。

近所には彼方家美人五姉妹なんて言われてたり。

「なにって、弟がキスをしてくれるという事だから待ちわびているわけだが…」

俺そんな事言つてないぞ!

因みに、いい加減に理解してくれみたいな顔を覗かせているが、猫仔姉さんは初耳だぞ。

「ふみゅう~、本当なの? 結城君」

「いや、違う! …断じて違うから」

「違つとはどうこう意味だ、結城! …」

更なる混乱。

どうやら猫仔姉さんは救世主メシアでは無かつたらしい。

都合の良い所で現れて助けてくれるドラマの主人公のような存在かと少し期待した俺が馬鹿だった。

現実は甘く無い、つくづく痛感するね。

つて、痛感してる場合じゃねえよ。

取り敢えず、空気が重い。

原因？勿論沙織姉さん

なんか怒つてうつしゃる。

「沙織姉さんだからね、何度も言つたゞ姉弟でキスつておかしいでしょ」

これ何度目だろ？

もう諦めた方がいいんでしょうか？

「ならばなんで姉さん達とのキスは良いんだ？」

それを持ち出されると……

ハツキリと言えばイイとは言つてないんだがね。

「ふえ、結城君…姉さん達とキス…したの？」

そういえば猫仔姉さんは聞いて無かつたんだっけ……

「ああ、ちゅうと色々とあってね…でも俺から…」

「結城君…キス…しちゃったんだ…ふえええん」

ビービー辺に泣く要素が含まれてたんだ。

ハツ！？

何故泣く！？

「ななな、どうしたんだ…！猫仔…！」

つてか、沙織姉さんの動揺つぶりも凄いな。

第一次彼方家弟キス大戦

彼方猫仔の号泣により終幕

第一話 次女、三女とキス戦争（後書き）

ああ、はい変態ですよ私

第三話 二女、五女と甘~い展開（前書き）

腰が痛い… 関係なし

わづかすうに血口嫌悪を繰り返しながら執筆していくよ……

第三話 二女、五女と甘い展開

あのままでは何時まで経つても収集が付かないのを取り敢えず、リビングに移動した。

完全なる正常な状態とは言い難いが
ある程度意識を保っている人は簡単に移動させる事が出来たが……

猫仔姉さんと莉子姉さんは苦労した。

それは何故か

猫仔姉さんは泣きじゃくつてこっちが相当な力を入れないと動かない。

莉子姉さんは意識が無いため、普通の人より軽いと言われてもやはり気を失っている人間を持つたらそりや重いわけで……

閑話休題

リビングに戻つて来てから十分程が経過した。

猫仔姉さんも大泣きからすすり泣きぐらいにまでレベルが格段に下がつたわけだ。

「落ち着いた？ 猫仔姉さん」

一応、心配だつたし声を掛けておいた。

そこまで泣くものか？

つて感じだけど俺に猫仔姉さんの気持ちが分かるわけでもあるまい。

だから優しくする。

うん、なんかナルシストみたいだな。

自分自身に痛さを感じたよ。

今の状況を説明すると俺がソファーを背に床に座つていて、その隣に猫仔姉さん、テーブルを挟んで沙織姉さんと茜姉さんという状況だ。

ちなみに莉子姉さんは、俺の部屋のベッドにぶん投げといった。いや、ゆづくじと置いた。

…ぶん投げる勇氣無かつたんだよ。

もしかしたら、将来奥さんに尻に敷かれるタイプだつたりするのかもしれない。

それじゃあまりにも悲しいので、フリーストだと思う事にする。

「うん、大丈夫だよ…大分落ち着いたから…ふえ」

そういえば、そんな大丈夫か？みたいな質問をしたな……

ヤバい、もう年か…？

若年十五歳にして…

オイオイ勘弁してくれよ…

ひとつ、これまた関係ない話に花を咲かせてるな。

「なら、良かった」

「ふわあ…」

「口つと微笑んだら、猫仔姉さんが変な言葉を出して頬を桃色に染めた。

もしかして…俺なんか恥ずかしい事言つたのか?

「モニ…イチャイチャオーラ私の前で出すとは良い度胸だな…！」

俺はそんなイチャイチャオーラなんてイライラされるような物は出した記憶が無いが…

沙織姉さんが敏感になつてているだけだと推測。

結論は無視

「」で反論なんかすれば、一分後には俺の亡骸がリビングに転がつている可能性がなきにしもあらずだと思つたし。

「ふえ、そつ、そんなことないよ」

「うんうん、本当にまだ付き合つ始めたのかップルみたいだったよ、ねえ沙織姉さん」

沙織姉さんを見つめながら同調を求める茜姉さん。

あまり刺激するな！茜姉さん！

ざまあみる、みたいな顔をしてるが俺はなにかしたかな？

もしかして俺の事嫌いなのか！？

オイオイ、軽く…イヤ、重くショックだぜ

実はかなりシスコンか…俺…?

…気にしないでおい。

「フフ…確かにな…」

「一旦落ち着こうか、沙織姉さん…！」

ゆうくり怒りを隠すよつこ、沙織姉さんが立ち上がった。

どうやら、そんな事を考えている暇なんて無いほど状況が田まぐるしく変化していたらしい。

頬に嫌な汗がつた。

てこゝかこのままだと死ぬ。

まあ、死ぬとは言い過ぎだが五体満足で居られるとは恐れ多くも思わない。

否、思えない。

病院？止めてくれ、一番嫌いな場所だよ。

「やめてよ～、沙織姉さん！結城君を傷つけないで…！」

そう言って猫仔姉さんが俺を庇つよつこ、そして体全体を包み込むように抱き付く。

ちょっと男性の憧れの谷が僕に当たつてますよ…！

つてか、猫仔姉さん着痩せするタイプか！？

「う、止めるから結城にくつ付へのも止めりーー。」

猫仔姉さんはナヨナヨしていたが、ジリやら効果はあつたらじー。

まだ不満な顔をしていたが、沙織姉さんはビートオの巻き戻しのよつにゆつくりと元に居た位置に戻つていつた。

「ふう…助かつたよ猫仔姉さん、ありがとう」

頭を撫でてあげる。

感謝の印

前、お礼をする機会が有つて

「何が良い？」と聞いたら

「頭、撫でて～」と言わされたので、それからはずうーっとこのスタイルだ

「ふみゅ~」

いつして頭を優しく撫でると、この猫…ならぬ猫仔姉さんは皿を細めて気持ちよさそうにする。

一瞬本当に猫だと思つてしまつた俺はもしかしたら眼科に行つた方がいいのかもしない。

「お前ら…私がここに戻つた意味を理解してゐのか…？」

「う~めん、あんまりカリカリしないでくれよ」

「 セセてるのは誰なんだ？ 結城」

そんな怒つてたら綺麗な顔が台無しでっせ！

そんな軽口の一つでも叩きたい所だが、とてもそんな事が言える状況ではない。

猫仔姉さんと俺は俯き、茜姉さんは静かにコロッチを静かに見やり、沙織姉さんは俺を睨んでる。

そして沈黙……

空気が重いとはこの事だろつか？

いつもは居る、やかましい莉子姉さんも、一番大人な長女雪姉さんも居ない。

普段はあの一人がなんだかんだで色々気を利かしてくれる為に、俺達もなし崩しみたいな形ではあるが収集する。

やつぱり、年上なんだなと今にして氣付く。

ある程度、敬うべきなのかもしれない

「 ハア～」

顔を俯いた状態で上目遣いで沙織姉さんをチラチラと見ていたら、沙織姉さんがいきなり深い溜め息をついた。

「 ビ、ビンしたの？」

焦りながら、聞いてるの丸分かりじゃんよ俺。

役者には向かないな
目指してなんかいなけど……

「いや、ただ私がこんな小さな事で怒つて結城にでも嫌われたら、
と思つたら変な意地を張つている私がバカバカしく見えてな」

「ハア、良かつた……」

情けなくもホッとした。

じつくり色々考えてみると俺は悪くない筈なんだが……

「なんかそこまで露骨に女心されると少し落ち込むな

しづげるように肩を落とす沙織姉さん。

しづがないだろ、生死の境を分けるわけだから。

「いや、ただし……沙織姉さんに嫌われなくて良かつたな、と思つた
だけで」

言つておくが嘘ぢやないぞ。

生きるか死ぬかというのも重要な話ではあるが、やはり沙織姉さん
も姉さん達には嫌われたくないというのもかなり重要だ。

俺はやはりシステムみたいだ……
これもなんていうか悲しい限りで

「今更だが、結城つてかなりプレーボーイだな…」

今度は立場が逆転して、沙織姉さんが顔を俯かせる。

更には顔真っ赤つか。

それに感化されて俺も真っ赤つか
いや、そんなあからさまな反応されるとコッソも恥ずかしいから。

冷静になれば確かにかなり恥ずかしい事を言つてるな俺。

「ふみ～、結城君！～！」

また、自分でもわかるべうつたむこね坂を出していたら
今度は猫子姉さんに怒られた。
頬を膨らませて

とても年上とは思えないな…小動物的な可憐さ…まあ、猫だな。

「アハハ、疲れたから倒寝するーことにするよ。」

しかも、逃げる理由として弱すぎる
自分のボキヤブリの少なさを呪つちやうね。

だが言い出してしまったから引けない、引く気もない。

「結城君！～」

「眠い眠い、おやすみねー姉さん達」

逃避と言われば、そつだと強く言へ返してやるよ。

怒っている猫子姉さんを無視してすばやく一階へ駆け上がる。

なんか、まだ言つてゐけど俺は恐ずぎて振り返ることすら出来ない。

情けないな、俺

今の心情、情けないなんて知ったこっちゃない。

こつちは色んな事がありすぎて、精神だけじゃなく肉体的にも参つちやつてるわけだ。

なら、もつもんなこと気にしてられるか！…と声を大にして言つた
い。

とまあ、なんと言ひますか恥ずかしい話をしている間に俺の部屋に到着。

ちなみに階段の傾斜が高すぎて転びそうになつたところのは内緒。

「疲れた…」

部屋に入った瞬間、誰にでも無く呟いた。

いや、それは違うな…
自分自身に言つた。

今日は本当に色々なことがあったんだ、マジで。

姉とのキス…しかもティアードまで…
そして危機一髪、慰めるなどなど。

一日を締めくくる恋愛ドラマなど、まだ一時なのよな。

まあ、いこや

寝るのは逃げるための口実のつもつだつたけど寝ちゃう。

べつしよせなく疲れたし……

第四話 次女と貞操の危機

「ん…何時だ…？」

PM2時

一時間しか寝てないのに起きあがめられたよ。

正確には起こされたのかも…理由は後だ。

取り敢えず、眠い目を軽くすりながら頭を覚醒させ上半身を起こす。

そして布団を一気に剥ぐ。

「イヤ、マジでアソタなにしているわけ？」

俺はひとつでに誰かに問い合わせた訳じゃないよ、そんな痛い奴になつた記憶はない。

勘違いされたら困るので言つておぐが靈感も無いぞ。

俺が問い合わせた相手はこちらを静かに向いた。

「ん? 何って、やーーんなの息子じーじーの

「おー! おー! 反ともうひがみが婦女が息子やーーのやーーのじーじーありますん! 」

しかも軽々しく。

俺は親か……

下半身のある一部が何者かに触られてる気がして、布団を取つてみれば居たのは、愚姉もとい莉子姉さんだ。

「てか、何で？」

疑問符しか出てこない。

怒った猫仔姉さんが入つて来れないように、部屋の鍵は閉めたし。この愚姉がピッキングなんて高等技術を持つてるとも思えないし、その形跡（針金）も無い。

当の本人は

「ああ～、そのことか」と言つてポンと手を叩いた。

何のことだ？

「どう」とや？

一人で納得されても、一番理由を知りたい俺が永遠に理解出来ないので、説明を促す。

「あのね、気付いたらね、ゆーくんの部屋に居たんだ。」

…?

それは、答になつてな…ああ～…！

…やついえば、放心状態だつたのをここまで運んできたんだつタ…

脱力感にみまわれた俺は体をダラリとだらす。

「大丈夫、ゆーくん？」

ありがたいけどさ…

心配してゐる間だけでも、手の動きを止めて欲しいよ、俺は。

気持ちいいと思つた瞬間俺の負けだ…コレは…

「つて、なんでこんな事してんだよー…？」

遅いから…氣づくの遅いから…！

朝弱いんだよ…

朝じやないけど、寝起きばボオーッとするつてやつへ。

「話、少し長くなるけどこい？」

長くなる程の事なのか知らんが、聞かせてもらわないとこには何も
わからない訳で。

取り敢えず、いつまでも忙しなく動いている莉子姉さんの手を止め
る事に。

悲しんだような顔するな。

なんで何も悪くない俺が罪悪感を感じなきやいけない？

「で、長くなつても構わないよ」

そういうたら、また俺のマイ・サンを触つてくれる、愚姉。触らせないと喋らないとか？それは姉とか言う前に人間としてどうよ。

放つておくことにした。

俺の理性が極限まで続く限りだが。

今までには、ずっと冷静だったが、脳内では第一次世界大戦頃負けの戦いを繰り広げている。

勿論、本能 vs 理性

情勢的には理性の劣勢も劣勢。

：当たり前だ！！莉子姉さんは美人なんだぞ！！
とまあ、逆ギレ風に言つた所で解決はしない。

姉というストッパーがなければ豚箱の中かな？

「よしよし、説明するね！」

頭を撫でるのは止めて欲しい。

それとつべこべ言わずに早く説明をして欲しい。

俺も結構ヤバかつたり

言い方は変だが

「ハアハア…」と俺も変質者のようなマズい息をつき始めてるし。

「最初から説明すると、氣絶から華麗なる復活を遂げた、私、そして回りを見回して見ると…なんと…！…ゆーくんの部屋、ゆーくんの

布団ではありますか！！

妙に芝居がかつた抑揚の付け方。

別にコツチは下手な三流の芝居を見たいわけじゃないんだから、早めに結論に辿り着いて欲しい。

……いや、ワザと延ばしてるのか……？

ならばなかなかの策士だな。

今、俺は思考能力が何時もの比五割くらい低下してるわけだし……

関係ない話ではあるが、今の俺達の体制は息がかかるくらい近かつたりする。

莉子姉さんが、俺の上に乗つかっている状態。

体はくつついでいて、大きな一つの柔らかいお山は俺のアバラ辺りに押し付けられていたりする。

こんな状況は、なかなか体験出来るものでは無いだろう。

あらゆる意味で go to heaven

いや、寧ろ地獄か？

「って、人が話してる最中にどう向いてるのー？」一くん

そっぽ向いてるわけじゃなくて、直視出来ないんだよ。

と心では思いつつも恥ずかしさから何も言えない俺。顔より下を見ないぞ！と誓い姉さんの顔を見る。

「う…………！」

だが目を逸らす。

顔だけなら！！と高を括っていたが、少し頬を上氣させこっちを見つめている顔は何時もより色っぽくて、とても長い時間見ていられるものでは無かつた、正直な所。

姉さんも目があつた瞬間、目を逸らされた。

…もしや、なんか変な顔してたか？

「まつ、まあいいや……そのままの体制で聞いててね」

何故慌てる！！

気持ち悪かったなら気持ち悪かった、と言つてくれ！…
いや、やつぱやめて立ち直れない……

一ヶ円聞くりごヒツキー出来るかも……

「で、なに？」

阿呆な思考は停止させる事に
なんか、血虚しそぎだなあ俺。
自分を大切に私からのメッセージです。

アホ度合いがわざよつ五割増しで上がつてゐるが気にするな、気に
したら負け。

「あっ、やうだね…え~っと、どこまで説明したつけ?
「俺の部屋だつて気付いたとこ」

覚えておけよ……と思つました、正直。ベッタリと引っ付いている

わけだし、考へた事が飛んじゃうつてのも分からんでもないが……

そもそも、引っ付いてる事がおかしいのか？

「ああ、そうだった！」

バカといつ言葉が喉まできたがギリギリで飲み込む、後が怖い……

「で、ゆーくんの部屋だつて気付いて、直ぐにリビングに行こうと思つたんだけど……布団から出られなかつた……ゆーくんの匂いがついてたから……ね！」

赤く染め上がつた頬に手を当てる、莉子姉さん

田の焦点が合つてないぞ、大丈夫か……？

俺も苦笑いになるわ、こりゃ

ん？よくよく考へてみると、布団に俺の匂いがついてたから出られなかつた、と

ハツ！？もしかして俺つて体臭キツいの！？
自分ではそんな臭くないと思つてたのに！

いや、でも体臭とか口臭つてのは、自分では気付かないもんだからな……

「ゆー、ゆーくんは臭いんじゃなくて良い匂いなんだよ……」

俺の落ち込んだ様を見て、俺が何を考えたか理解したのか、頭と手

をブンブン振つて否定。

そこまで、やつたら頭と手が取れちやいますよ。

「で、それから？」

莉子姉さんの頭とかが取れて貰つても困るので、話を変えた。

恥ずかしいしな…

良い匂いなんて初めて言われた。臭いなんてのも言われた事無いが

……

香水なんかも付けて無いし。

もしかしたら、莉子姉さんの鼻がおかしいのかもしれないけど。

「ああ、そうだね！それでゆーくんの匂いで体を火照らしてたら、いきなりゆーくんの部屋のドアが開いてゆーくんが入つて来たんだよね！」

火照らしてつて……今、牛乳口に含んでたら吐き出したかも……やっぱり牛乳から水に変換してくれ、なんか卑猥だ。^{ひわい}

「それで、まだ匂いを感じていたかったから、ピクリとも動かずやり過ごうとしたら、意外や意外上手くいっちゃつて……」

手で後頭部をさすりながら舌をちゅるつと出す莉子姉さん。

あくしょー、可愛いじやねえか！－

見とれてツツ「//」されちゃったぜ。

いや、実際忘れちゃったぜ、じゃないよな。

いやその前に、ツツ「//」とかの問題なのかな?

結局、後の祭りか……

「やつた、つて喜んでたら、ゆーくん私が布団の中に入ってるのに侵入して来て……」

その時の事を思い出してるのか知らんが、莉子姉さんが頬に手を当てる。

なんていう失策……

「//」でベッドがクイーンだつた事が仇になつたか……

「でも、入つて来たらすぐ寝ちゃつてさ、大胆なゆーくんなんておかしいと思ったよ……」

今度はしょぎたようにチヨツチヨツ舌打ちする。

言葉一つ一つに感情を起伏させて、面白い。見てるだけでも十二分な暇つぶしになるわ。

「姉に手を出すわけ無いだろ」

そつとつて莉子姉さんの頭を軽く小突く。

「なら、ゆーくんの下半身に付いてる物を出してくれないかな?」

Jの人はもう末期だ、下ネタクイーンめ。

「やうやう」とね、分かつたどけて

極めて冷静に

頭の中は、もうおかしくなつちやこやうなくらい混乱している。

表すならば、理性の籠城でキリギリ凌いでゐつて感じか？

分かりづら...

「こやーーー」

…ハツ？

なんだ嫌…！…って襲ひついのやうひ…！…

「そんな、我が儘…なよ…んつ…！」

驚いて皿を覗開く、皿の前にあるのは皿蓋を開いた莉子姉さんの顔。

どうやら、またもキスされてるらしい。

莉子姉さんの舌が、深く濃厚に俺の口内を犯す。

「アッ…フア…アン…」

莉子姉さんの甘い声、息が俺の頭をおかしくせせる。

一分ぐらいいたつた辺りで、莉子姉さんの顔が俺から離れた。

「ハアハア……ゅーくん……どうだつた…？」

リンゴのように赤くなつた顔、トロロンとしている瞳で聞いてくる莉子姉さん。

ダメだ…姉弟で…そんな…

心とは裏腹に体は震つた事を聞かず、手が莉子姉さん胸に向かつ。

俺はなにを…！

マズい事をしそうになつた事に気付き、慌てて手を引っ込める。

「我慢する必要なんて無いんだよ…」

耳元で甘く囁く悪魔。

小悪魔なんてもんじゃないぞ、もつ

そして俺の耳を歯を立てず軽く噛む、莉子姉さん。

もつ…無理だ…耐えられない…

『ハハハ』

俺の手が莉子姉さんの服に手が掛けた時に、部屋の戸がノックされた。

誰だ…？

「 ゆう～、『 飯できたよ～、降りておいで～』

ドア越しに姉さんの声

『 飯か…

… てか、ヤバいって俺…！ なに考えてんの…！ ？

慌てて、莉子姉さんを自分の上からどかす。

「 チヒ、あ～あ駄目だった。じゃ、私は先に下りてるからね、ゆ
ーくん」

そそくさと俺の部屋を跡にする。

一緒に行つた方が良くない？

なんだこの放置プレー食らつた気分。

第四話 次女と貞操の危機（後書き）

どうも、城崎です。

今回も一話同時更新

第三話は甘つたるく、第四話はエロく
色々とキャラを際立たせながらやつしていくので、読者様に一人でも
好きなキャラが出来たら嬉しいです。

作者のやる気は感想に掛かっています。

第五話 オマケに飲負け（前書き）

はい、もうたつぱり遅れてスイマセン…

第五話 オマケに飲負け

今、リビングに居ます。

現場の彼方結城からでした。

端的な内容を述べて、キャスター風に現在の状況を説明してみた。

ハイスマセン、どうでもいいです。

田の前に並ぶのは、朝と同じく美味しそうな夕食

勿論、雲姉さんが作つたものだ。

仕事からは帰つてくる。

重役なのに、そんなに早く帰つてきて良いのか?といつ疑問がある
と思う。

それは、浅い話その会社の社長が理解ある人だから早く帰らしてくれるわけだな。

「なにしてんの?ゆう君、もしかしてマズそう?」

ただ座つたまま、何時までも食事に手を付けない、俺を見て色々と勘違いしちゃつてくれたらしい。

今にも、涙腺が決壊しそうな顔が俺の母性本能を掻き立てる。
いや、男だから父性本能か?

どうでもいいけど…

抱き締めたい……

「凄い美味しそうに見えるよ、早く食べたい。」

「ハハハとした、思いつ切りの笑顔を精一杯する。

笑顔過ぎて逆に気持ち悪いかも……

抱き締めたい本能を理性で抑えつけただけで良しとしようと
いくつも気持ち悪くとも

「やつぱ可愛いなあ、ゆう君は」

可愛い？

俺は可愛いよりも格好いいと言われる派の人間だと認知しているが

……

悲しいかな、どちらかといえばの話だ。

『ガチャガチャ』

雲姉さんの言葉を右から脳へ一回転させてから左へ受け流した後
いい具合に空じてきた、人間の欲を満たすために食事に手を付けよう
としたら、家のドアが音を鳴らした。

間違つても性欲では無い。

それも足りて無いから、あんな危機が起こったのかも知らんが……

「今日は早いなあ、出迎えだよ、ゆう君」

「了解…」

今更ながら、あんなバカな事を考えて無いで、せっせと食べておけば良かつたと思つた。

まあ、一瞬で済む話なわけだから我慢するけどや。

早く済ませるために、少し駆け足で玄関に向かつ。

「誰ですか～？」

この部分だけを見れば、ドアに向かつて話しかけている、危ない奴だがドア越しに人が居るのでオーケーだ。

「結ちちゃん、開けて～」

まあ、予想済みの人の甘つたる～い声。
ハア、一瞬開けるのヤになつたよ。

その間にもガチャガチャとドアが音を鳴らす。

「今、開けるからやめれ

騒がしくてしゃあない。

無音のドアの鍵をゆっくりと開ける。

『ガチャ、バタン』

なんだその瞬間芸は！？

俺が鍵を開けた瞬間に開くつておい

「結けい ゃん、ただいま～」

自分の両手を俺の首に巻き付かせてから飛んでくる。

今の状況はお姫様抱っこ

「飛ぶなよ、危ないだろ」

「結けい ゃんなら、ひやんと抱っこしてくれるって思ったもん」

拗ねたように頬を膨らませる彼女。

やっぱ……可愛すぎやん……

「ハイハイ、母さんもいい大人なんだから甘えないの」

頭をよしよしと撫でる。

俺にお姫様抱っこをねだっている彼女は、俺の母親である。

名前は彼方 初音はつね

雫姉さんの勤めている会社の副社長にあたる人物

因みに社長は母さんの父、俺の祖父だ。

容姿は美人。

会社なんかでは副社長と美人で高嶺の初音なんて呼ばれてる、な

んて事を雪姉さんから聞いた。

正直な話どうでもいい。

やはり雪姉さんと同様で家では俺にベタベタ。

前、会社に弁当を忘れていたので届けに行つた事があつたが
俺を見たとたんコッチに飛んできて、俺にベタベタくつついてきた
事が記憶に新しかつたりする。

それで一緒にいた、偉そうな叔父さん達が驚いてたな。
開いた口が塞がらないって言つのはああゆう顔のことかと知つた。

「 私まだそんなに威張れる程年じや ありません

声に張りがある、少しじて立腹のよつだ。

「 セリだな、今年で23だつけ?」

「 セリセリ、よく覚えてるね」

そりゃあな……

家族だもん。

此処で疑問が浮かべばアナタは頭の回転と記憶力が高い。

俺は今年で高一だ。

で、母さんこと彼方初音が今年で二十三歳
計算が全く合わない。

それどころか姉さん達までいるんだ。

「……」どう考へられる理由は一つ、俺と姉さん達が父親の連れ子どころで、孤児院の子供だという理由。

俺に父さんは居ない、といつことば……

俺や姉さんは孤児院の子供なんだ、実はつまり俺と母さんは他人義理の親子、因みに俺と姉さん達も血は全く繋がってない。

義理の家族、でも俺はそこら辺の一家よりも絆は深いと思っている。まあでも深すぎるってのも考えもんだがな……

「取り敢えず、降ろすぞ」

何時までも、持ち上げてたら幾ら軽いとはいえ疲れる。

とこづか姉さん達の俺たちを見る目もきっと痛いだろうしな。

「重い、とか思つたでしょ」

何を勘違いしたのか、此方を睨んでくる。

そんな事は全く持つて考えてない。
寧ろ逆、軽いとか思つてたし。

まあ、俺がそんな事を普通に言つわけがない。

勿論、

「さあね」と返しておいた。

「むつ、結けやん可愛くない」

お姫様抱っこされたまま、怒られてもな……

可愛くないー、ってそりゃそうだら
別に、猫仔姉さんみたく童顔じゃねえんだから。

母さんも頬を膨らますと子供っぽい声をあげる。

綺麗な分、子供っぽいのは似合わないこと御うがこれはコレド……

これが噂のギャップ萌えってやつ? いや、違うか……

取り敢えず、有無を言わざずゆり降りす。

俺、ジエントルメン

案外すんなり降りてくれたのは助かった。

降りた瞬間母さんが俺の方を向いていきなり手を出してきた。

「結婚やん、なにしてんの? あと連れて行つてよ」

それを見て

「何やってんだろ?」とか、軽気に思っていたら
「急げ」と簡単に言えば、そう言われた。

やつと理解したんだが……

手を繋いで行けと? この5メートルも無い距離を?

「勘弁してよ、姉さん達に見られたら色々アウェトなんだから……」

アウトつか

「お母さんには出来て私には出来ないの?」的な**疲労困憊する**フワグが立つよ。

うん、確実に

「結婚やんは勇氣の欠片も無いね、名前負けだよ^{かけら}」

「ハア」と溜め息をついた後、肩を落とすオーバーリアクション。

一つ並べる」とせ、名前ネタはNG

それから何の問題も無じて、コンビングに行へー」とが出来た。

一安心…なのか?

いや、どうでもいいか

これもいつもと変わらないし。

「お母さん、お歸り~」

なんとも猫仔姉さんらしい間延びっぷり

なーんて思つたが、なんか声が違う。

フニャフニャな声

わかりやすく囁くと…

「酒ぐわつーーー！」

思わず花を摘んでしまつほどのアルコールの匂いだ。

そこに赤い顔をした一人の女性と、至つて普通の顔をした女性一人、そして床に寝つ転がっている女性一人。そして散乱した酎ハイの缶と、一本開けられたワインの瓶。

てか、なんでそりなんだよーーー！

俺が出て行つて色々と母さんと話しあつた時間を、多く見積もつて十分ぐらいだぞ。

なんでこの数分でこゝまで飲んだくれる事が出来んだよーーー？

「これって…結ちやん、どうゆうこと？」

目を丸くして俺に問い合わせてくる母さん。

それは一番私が聞きたいですよ、お母様

「わかんない…正直、この短時間にこの人達に何があつたのか…？」

本音しか出ない、俺の口

問題は無いけど

そつやつて暫く母さんと一人放心状態になつていいたら
ヨタヨタしながら、莉子姉さんが近づいて来た。
真つ赤な顔をした女性二人の内の一人の

「ゆーくん、いつひよにによもー」

いきなり肩に手を掛けたらお酒と一緒に飲もうってか
俺はまだ未成年だし、アンタらも零姉さん以外未成年だろ。
ある程度力が掛かつて肩に乗つている腕を払つ。
勿論、返答は…

「飲まねーよ」

酒は飲んでも飲まれるなど先人は言つた。

俺は確実に飲まれる。

俺は究極にお酒が弱い

前ノリに任せて少し、ほんの少しあルコールを口に運んだ事があつた。

…見事に酔いまして…その時の記憶は消えず、いまだに心の深い奥
をさまよつてる…

「ええー、つれないなー、ゆーくんはー」

屈託くつたくの無い笑みを少し不服そうな顔に変える莉子姉さん。

つるさい、つてか煩わしい、酒臭い、でもいい匂い

…ああ、完全に変態だな

この人も完全に飲まれちゃってるし

何時もなら雪みたいな白い肌も、今はリングのような赤い肌に変わつている。

「そうよ、ゆうはいつもノリが悪いし

もう一人飲まれちゃっている人物、茜姉さん

つて、茜姉さん！？！

「茜姉さんに酒を飲ませたの誰！？」

俺の怒声が部屋を反響する。

別にそこまで怒つてる訳じゃないが、犯人に少しばかり説教をしないといけない。

彼女はお酒が弱い、それもべらぼうに。

言い方は古いがそこはスルーだ。

説明するのは面倒なのでその他諸々は後々に。

一分くらごすると皿の前に恐る恐る手を上げる人が

莉子姉さんなわけだが……

「『メンね、ゆーくん…怒つてる?』

「いつ捨てられた猫のような皿をされた今、怒るに怒られないわけで…
それに涙目、更には俺より背の低い莉子姉さんがしがみつくると自然
と上皿遣いになる。

まあ、多分意識してやつてはいないだろうが……

「つなると怒る所か、理性が危ない。

「ハイハイ、結ちやんは怒らないから離れなさい」

俺達がなんやかんややつていたら、さつきから傍観に徹していた母
さんが、俺の異変に気付いたのか莉子姉さんをどかしてくれた。

「ありがとう」という皿線で母さんを見たが…
なんかぶすくれてない?

第六話 戦争と見せかけた、ただの諂い

「結婚やん……座りなさい……」

母さんから食事の乗っているテーブルを前に座るよう命ぜられる。ちょっと語尾が強いのが気になるが、そこは気にしない方向だ。

俺は将来奥さんに尻に敷かれるタイプのような気がするけれども、そこも気にしない方向で。

ちくしょう、皿から体液が……

反論するのも何かとアレなので文句一つ言わず素直に座ることに。そして俺が座った後、母さんが俺の隣に座った。

「ゆう、ホントにアンタは姉さん達に甘じ甘過ぎる。」

俺が席についた瞬間、コツチにチヨコチヨコ歩いて来て、母さんの座つている逆隣にドッカリと座り出す人物一人。

『ゆう』と俺の事を呼んでる事からわかると思つが、俺の隣に座つた人物それは、赤い顔をした茜姉さんだ。

そしてここから、酔っ払い茜のワンマン酔っ払いショ一（被害者結城v e r）が行われるわけで……

「あらうへ、アンタはねえへ、私の血ひじと聞こてつや良このよへ

「うそ、やうだねへ」

「私の話ひを聞きなせへいーーー。」

舌足りず口調で怒られてもな……
まあ、只今絶賛絡まれ中。

もう、茜姉さん。

最悪な状況である。

先程から助けて田線を長女、次女、三女、母親に送っているが、見事全員に田を逸らされるという結果に。

血は繋がってないとはいへ、さすが親子！
いや……多分誰にやうひと回じ反応なのか？

「結びやん、あへん」

とまあ考へても仕方がない事を考へていたら、いきなり横から鳥の唐揚げを摘んだ箸が近付いてきた。

軽く頬を上氣せつつ、箸を持つてる人物は母さん。

なんだそれは？

恋人の夢、『あへん』をやれと？

「あへん」

『パクツ』と摘まれている唐揚げを素直に食べたわけだが、異常なくらい恥ずかしいんですけど……

「ゆーくん、あーん」

どうやら照れてる場合ではなかつたらしい。

お次は零姉さんが唐揚げを俺の前方から持つてくれる。
アンタなら、もう良い大人ですよね?
いや、スマセン
正直嬉し恥ずかしです……

「ゆー、私のを食べてくれ」

前方へ顔を持つて行こうかといつ時に
斜め前、零姉さんの隣にちらから田を逸らしている沙織姉さんに唐
揚げを出される。

うん、それはなんとなく予想済みなんだけど……

何故みな唐揚げ?

いや、別に嫌いじゃないんだけどさ

「ゆーくん、勿論わたひのも~」

まあ、一人がやっているのに黙っているわけのない泥酔莉子姉さん。

何を持っているかは言わずもがな。

とまあ、零姉さん順に食べて行こうか……

「んんーーー！」

いきなり頭をガシツとしつかり五本指で掴まれたと思つたら、顔を横に向けられいきなり唇が俺のそれに付けられた。

と思えば驚きで少し開いた俺の口に舌と何かが侵入していく。

しばりくすると唇が離れた、銀色の糸が俺と茜姉さんを紡ぐ

「あ、茜姉さん！――なにを！？」

「唐揚げの口移し～」

いや、普通に答えてんじゃねえよ――！

「結びちゃん……なにやつてんの？」

唚然としていた一回だったが、いち早く平常心に戻った母さん。

お母様黒いオーラが全身から吹き出でます……

「結びちゃん……何やつてるのかな？かな？」

いやいや、ドジで怖いから

折るぐらうの力を込めて箸を握つてゐるが更に恐怖を増幅させるんだが……

「うわっ、あかちゃん大胆……」

いや、莉子姉さんはなんでそんなにノンビリなんだよー!?

前に般若みたいなオーラを出して居る人が居んのに！！

まあ、そんなこと気にしない岡太さを持つてるのが莉子姉さんだけ
だ。

「...莉子ちゃんなんでそんなに冷静なの?」

声が凄く低いです……お母様。

母さんの真っ当な間に一瞬黙だまつたが、心からしい顔をした。その豊満な胸を張つた莉子姉さんはいつ言つた。

「ゆーくんとキスなら私もしたから~」

てめええええええ！・・・・・！

いや、なんとなくそんな感じの事言うなって事は、読めてたけどさ

■ ■ ■ ■ ■

手を挙げるわけにはいかないし

取り敢えず、俺は莉子姉さんを鋭い目つき睨んでおいた。

ていたが
…

「イタツ！！」

すると、突然右頬に衝撃が来た。

“えりやう殴りれたらしぃ。

「誰だ……」的勢いを込めてキッと右を見てみると満面の笑みの母ちゃん。

田が笑つてないとかそんなんじゃなく、まさしく笑顔。
穏やかすげるくらこのね。

一瞬

「母ちゃんじやないのか!?」とか思つたが、母さん以外は俺は射程
圏内に入らないため母さんしか居ない。

笑顔すぎて逆に不気味なんだが……

見ていられなくて田を逸らして、周りを見てみると姉さん達も一様
に顔が引き吊つている事に気付いた。

いやはや母ちゃん、あの万年脳天氣の莉子姉さんの顔すり吊せりせ
るとせ……

「あの……お母様……？」

「綾ちゃん、なにかな?かな?」

なんだ素直に怖いんだが……

相変わらずの笑顔。

それが、俺の中の恐怖を更に掻き立てる。

「怒つてらつしゃる?」

「怒ってる?」なんて軽々しく聞ける筈もなく、意図せず尊敬語。いや~、自分のチキンっぷりには驚かされますわ~

ほぼ現実逃避

「あはは、怒ってないよ。」「

声は明るい、うん声はね……

震える拳を隠してトヤヒ……

ハツキリ言おう、俺悪くない!~

「結ちやんわ~、すけこまし」

ハウツ!!

グサツと来たわ!!

母さん……アンタ屈託の無い笑みで、凄い毒吐くな……

へコんだ……

「なつ!~?大丈夫だ、結城!!私は結城がすけこましで女にだらしがなくて、プレーボーイで、エッチでも結城が好きだから!~!」

グサ、グサ、グサ、グサ

慰めになつてない……

沙織姉さん、随分と切れ味が良いじゃないかその言葉……いい加減泣くよ……?

泣かなかつたよ……

耐えたよ……男だもん……

涙は出なかつたけど

心の傷は深いとここまで抉られた。

まあ、俺が床にのノ字を書いていたら動搖していたので、少し気分は晴れたけどさ。

「で、この酔いつぶれてんのはどうすんの？」

雪姉さんと視線を交錯させる。

聞いてるわけだ。

俺の肩に頭乗つけてると、フローリングに寝つ転がってる奴の遭遇を。

前者は、勿論絡んでくる酔っ払い茜姉さん。

後者は、お酒が弱いくせに何故かアルコールを飲んだ、猫仔姉さん。いや、なんでアンタ倒れてんのよ……

猫仔はお酒飲んで一分でぶつ倒れたぞ、とは沙織姉さん談だ。

女が三人集まつて姦しいと言つたものだが、5人だつたら煩わしいな……

第六話 戦争と見せかけた、ただの諂い（後書き）

申し訳ないっす。とただそれだけを
期待されてる方には……居なく……は無いよね……信じてます。
今回で、まあ一段落です。
ちなみに次回更新未定！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5182e/>

姉×Sisters + オマケ

2010年10月10日00時40分発行